要 旨

１.1 在漢口総領事館

本稿で取り上げる日本漢口租界は、明治三十一年、漢口に設置された。明治四十二年、蘇州、杭州、沙市、長沙、福州、汕頭、南京、重慶の八館にして、各地ともその在留日本人は福州の五百人を除き、概ね二、三百に過ぎない。その各地に於ける日清間直接の貿易額も、到底上海、天津、牛荘等の比にせざるべき、従って、この際蘇州、杭州、南京の三館を廃し、その事務を上海総領事館に併せた。沙市、長沙を廃し、これを漢口領事館に併せた。漢口は清国の中央に位置し、水路四通八達の地に在る。鉄路の増設と共に、付近周囲五、六百哩に於ける貨物の集散地となる。加えて対岸の武器には湖広総督の治所あって清国の時風として、高官を置く傾向ある。日本国も英米両国の如きは総領事を在勤させた。漢口領事館を総領事館に昇格することである。

1.1.1 在漢口日本人の教育状況

明治四十二年及び大正六年の統計によるに、在漢口日本人の数は、過去十年間に略倍、二千四十五人になった。児童数は約三倍四分の増率を示す、一百二十九人になった。学校（明治小学校）敷地は一百二十二坪である。文部省規定によれば、三百の児童に対する、その学校の面積は約九百坪を要する。今後を推定するに、この趨勢を以って進めば、学校移転問題は早晩考慮を有する。明治三十九年、日本人の数は六百六十名、大正三年には一千三百八十名となった結果、日本人学校を設立された。また、上級の「中学校高等女学校商業学校」などの設立にも奔走し、昭和十五年には、青年学校、翌年には、高等女学校が設立された。この規模は上海、天津に次ぐであったと思われる。

1.1.2 在漢口日本人の金融状況

漢口に於ける中流以上の商工業者には、主として日本人経営に係る当地の三大銀行である。即ち正金銀行、台湾銀行及び住友銀行支店である。この三大銀行を金融機関として、荷為替信用状況或は当座貸越等の方法により、融通を受けいれるが、この三大銀行は主として、何でも為替銀行なるを以って、為替以外に依る普通貸付を喜ばざる傾向ある。次に中流以下の一般小商工業者並びに、資力貧弱なる商人間に於いては、

（一）、日本人中流以上の商店或は、有福なる個人の資金を対人信用或は、動産不動産を

担保して、随時借用流通を計るものである。
（二）、頼母子講を組織し、その落札講金を以って、資金の融通を計るものである。（三）、高利貸乃至質屋より借用するものである。
大體三種の分類である。

1.1.3 在漢口日本人の衛生状況

当時在漢口日本人間の衛生機関としては、二、三の病院しかなかったである。且漢口の気候不順にして、風土病及び伝染病の発生頻繁なる。病症の種類如何により、適合する薬品の缺乏のみならず、特にやり口を有する、専門医師の診断を乞わん場合は、容易ならない。けれども、その当時の在漢口日本人の程度には、到底これ以上の事は期待できない。

1.2 漢口事件

漢口四三事件とも言う。

1.2.1 事件前の一般事情

明治時代の初めから中頃にかけて、大平天国の乱や辛亥革命の乱だけでなく、天地会の乱、捻軍の乱、白蓮の乱もある。反乱軍が正規軍を駆逐して、国を樹立され、地方を支配したこともある。匪賊組織の反乱もある。この時期中国全土は討伐、略奪、暴行に満ちた時期である。中国全土の治安は急速に悪化し、匪賊会社に変わった。国民政府が民衆を後援として革命を達成しよう、結果は無産階級の解放を無制限に許し、遂に彼らを無節制に横暴跋扈させるに至り、内外人は皆不安と脅威を感じ、前途を憂慮したところである。

日本人関係の頻発案件は下のように：

（一）、建物会社所有空き地の鉄条、柵を破壊、持ち去る事件である。
（二）、青年会大方場の木柵を破壊、持ち去る事件である。
（三）、多田洋行に対し、威迫取財事件である。
（四）、不当船賃、車賃強要事件である。
（五）、糾察隊の日本人、不法監禁事件である。
（六）、三宣洋行被害事件である。
（七）、三喜農園に対し、加害計画の件である。

（八）、洋務工会糾察隊、当館不法闖入事件である。
（九）、大倉洋行住宅の竹垣を破壊事件である。
（十）、馬頭苦力等の不当賃銀要求の件である。
上陸散歩中の水兵に対し、小児等が投石揶揄する等の事例を枚挙に遑ない。

1.2.2 総領事の措置

以上の通り頻発した不愉快極まる事件に対して、総領事はその警察署員を督励して、機宜の措置を講じさせた。外田中副領事を外交部、総工会、市党部、農民協会等に遣して、幹部連と隔意なき懇談させた。根本的にこのような下級労働者の妄動取鎮め。一方、万一の場合を顧慮して、租界外居住日本人婦女子の任意引揚を手配した。三月三十日、南陽丸に婦女子、一百三十名を引揚させた。

1.2.3 事件の発端及経過及損失

事件発端の原因について、今尚適確の調査を遂げざるを以って、その真相未だ詳なる。その日本人目撃者及海軍側の報告によれば、四月三日午後四時頃、水兵二名が通行中の五、六名の小児は背後より投石して執拗に揶揄し、不遜の態度に憤怒した、屡々振向きて、折柄二十五歳位の中国人若者が出で、横合より喧嘩を買うと見るや、付近の中国人が集まって来て、水兵を殴打し、一名は負傷出血して、一名は浪華食堂に逃げ込んだ。群衆の間に日本人水兵が中国人を刺殺したという噂が広がり、人心を激発させた。群衆は街上に於いて無辜の日本人に暴行を加え、家宅に闖入して、破壊略奪を恣にして、一時租界内は全く無警察の状態に陥り、日本人の生命財産は全く危険の状態である。事件の拡大と共に、陸戦隊の上陸の必要である。総領事は在泊先先任指揮官安宅艦長と協議し、四月三日午後五時過ぎ、在泊警備艦安宅、嵯峨、比良、浦風、の在泊員全部約一百二十名を上陸させた。被害は一百五十戸、被害見積額は九十二万円である。

漢口事件を境にして漢口領事館や住民からの圧力が強まって、在留日本人は城内では商売を続けられなくなって撤退するしかなく、多くは漢口租界を離れた。そして、荒れに任せた倉庫跡にしか見えない旧日本租界に、日本人の姿がだんだん消えてしまって、漢口は日本人の租界ではなかった。

キーワード：領事館、漢口租界、漢口事件